夕焼け通信 1344号　2022.3.7
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）90

木幡智恵美

職場復帰準備（3）

慣らし保育に行くようになってストレスが溜まるのか、週末みんなで我が家に来た時、宗矢は「うーん、うーん」と言って抱っこをせがみ、食事も私の膝の上で。お昼寝するまでほとんど抱っこをしていた。小学校入学が近づき、保育所での昼寝がなくなった寛大を残し、母子三人は炬燵にはまって昼寝。寛大は一人広告で剣を作ったり、鞘をつくったり、段ボールで斧を作ったり。その姿を見ていると、長男を思う。夏は虫、冬になると、毎年違ったマイブームを起こし、ある年は工作にはまって、本を見ながら一人黙々と作っていた。「寛ちゃんは、スイカのおっつぁんに似てるね。おっつぁんも工作が好きで、いろいろ作ってたよ」と言うと、「何作っちょった」と聞く。「一つ取ってあるよ」と言って二階から汽車を持って降りた。蒲鉾板くらいの大きさの板に四個の戸車を打ち付けて車輪にし、その上に厚紙で機関車の形を作り、煙突もつけている。隅々まで真っ黒のアクリル絵の具を塗り、なかなかの出来だったので捨てずに取っておいたのだ。「おっつぁん、すごいね」と寛大。穏やかで癒し系のところも寛大と長男は似ているのだ。

それから二、三日後、宗矢は熱を出し、慣らしの予定を延期したとのこと。ようやく熱が下がり、託児所に連れて行った日の帰りに我が家に寄り、玄関を入って私の顔を見た途端、わあっと声をあげて泣き出した。ずっと堪えていたものが噴き出したのだろう。泣き止むまでただただ抱っこをしていた。

その週末、「宗矢、四月から、実歩と同じ保育所に決まったよ」と、来るなり娘が嬉しそうに言う。「よかったね」とは言ったものの素直には喜べない。お試し段階でストレスを溜めている今の宗矢を見ていると、二か月ほど託児所に通って慣れたところで、また環境が変わるというのは可哀そうだ。しかし、二箇所に預けるのでは娘が大変だ。まあ、実歩が一緒なので、案外慣れるのは早いのかもしれない。寛大など、託児所を含め保育所が三回変わった。親も大変だが、子どもも大変だ。

月末になり、いよいよ娘の職場復帰は迫って来た。義母は周期的に大きな声を出していたのが、大分減ってきているようだ。心にはかかるが、今は孫のことが気がかりだ。

がらがら橋日記

宮森健次

定年本

三月になってみると、去年の今頃はどげだったかいなあとついつい振り返ることが多くなった。退職を目前にして、煮える前のやかんのごとくポコポコといろんな感情の泡が浮かんでいたっけ。

あれこれと定年本は読んだ。退職してからでは遅い、五十になったら準備しとけ、社会とのつながりを切らすな、といった類いの。あるいは古今の思想から説いたもの。それぞれ綿密なリサーチからのアドバイスだったり、長年の思索から説いたものだったり。あまりに数が多いものだから、図書館で借りてこれぞというものがあれば購入しようと数々読んだが、結局金を払ってもいいと思えるものには巡り合えなかった。自分の置かれている状況や条件なんて自分だけのものなのだから、自分でどうにかするしかないという身も蓋もないのが結論だ。本に導いてもらおうなどと不純なことを考えた自分が愚かだった。

それでも読んでいるときは一時的にせよ刺激を受けるのであって、そば屋を開くとか大学に社会人入学するとかまでは思わなかったけれど、一通りは夢想したものである。子どもの頃から関心をひいたものを書き上げてみよ、そこにヒントがある。などと説かれてみると、その気になってノートに書いた。小さい頃の楽しみなどずるずると引き出されるもので、確かにこいつはまたやってみてもいいか、と思うものもいくつかあった。時間はあるのだから片っ端からやってみるか、などと思うと、けっこうわくわくした。

一年経って、それもずいぶん弱火になった。やかんの泡は底にひっついたまま上ってこない。退職してから始めたいくつかのことは、一年前の夢想とは関係がないものばかりだ。働くなり、趣味なり、何かしなければ、とあの頃いったいぼくは何に駆り立てられていたのだろう。何もしなけりゃだめになるぞ、と言わんばかりに。あせってつかみに行かなくても、したいことは向こうからやってきたり、人がひょいと与えてくれたりする。これまでもそうだったし、退職したからって変わらないとわかっていたにもかかわらず。

退職してすぐにスープレシピの本を買った。日付と三百六十五種類のスープが載っている。ごはんとスープだけの日があっていい、という一文にひかれた。一人暮らしの父の食事を作るために、これならできそうだと思った。父は食べることなく逝ってしまったけれど、今もぼくは毎日この本とともに台所に立っている。したいことリストに料理はなかったのだが、作り続けているうちに、これはぼくにとってとても必要なことだったんだ、とわかってきた。求めていた定年本、ちゃんと購入済みだった。

30代フリーター　やあ、ジイさん。ウクライナに侵攻したロシア軍の苦戦が伝えられている。ウクライナ軍の士気の高さ、ロシア軍の補給の難航と兵士の士気の低さなどが指摘されている。

年金生活者　ロシアの兵士たちが自らの任務に疑問、迷いを感じていることがうかがえる。ロシア国内での反戦デモがそれを示している。ウクライナがロシアに攻めてきたわけでも、攻めてきそうになったわけでもないのに、いきなり前線に駆り出された兵士の多くは何のための戦争なのかわからないまま戦闘を強いられ、こんなことをしていいのかと心中ひそかに葛藤しているに違いない。それで士気があがるわけがない。けんかを売られて憤るウクライナ兵士とは対照的な心の状態にあるはずだ。

　そんなロシア兵士に、できることなら日本国憲法9条の条文をテキストか音声で伝えられたらと思う。それがこの戦争をすぐに止める力にはならないとしても、「あなた方の疑問も迷いも葛藤も正当なものであり、決して後ろめたいものではない」というメッセージを伝えることができる。それがやがてロシア国民の反戦・厭戦意識とともに、プーチンの侵略戦争をやめさせる力のひとつになり得る。

30代　右派からは「この期に及んでまだお花畑なことを言ってるのか」と言われそうだ。

年金　憲法9条は赤ん坊に似ている。赤ん坊は争う気も、その力もない。人間の理想状態を体現したその無垢さ、無力さを前にしたとき、ふだん粗暴な人間も「この子だけは傷つけてはいけない」と、むしろ守ろうとするだろう。でも、まれに危害を加えようとする者はいる。それを阻んでいるのが親や周りの大人の力だ。

　憲法9条はそんな赤ん坊のような無垢さ、無力さによって、各国の日本への攻撃の意思を溶かしてきた。そしてまれな例外に備え、自衛隊と日米同盟がその無力さを補ってきた。赤ん坊を親や周りの大人が守るように。

　戦後の日本が他国を攻撃しなかっただけでなく、攻撃を受けることもなかった理由の骨格を、こうした9条のあり方に見ることができる。言い換えれば、戦後日本の平和は9条だけが守ったのでも、自衛隊や日米同盟だけが守ったのでもない。

30代　志位和夫が「憲法9条をウクライナ問題と関係させて論ずるならば、仮にプーチン氏のようなリーダーが選ばれても、他国への侵略ができないようにするための条項が、憲法9条なのです」とツイートしていた。共産党も9条では「自国への侵略」を防げないことをついに認めた、といったような批判をネット上で見かけた。

年金　もしロシアの憲法に9条に相当する条項があったら、プーチンはウクライナを侵略できなかっただろうという想定が論理的には成り立つ。では、9条がロシアにではなくウクライナにあったら、どうなるだろう。戦力を保持せず、交戦権も認められていないから、ロシアはウクライナ側の抵抗をほとんど受けることなく無血でウクライナを侵略する可能性が想定される。

　だが、現に9条を持つ日本国民の大多数はこの想定に違和感を覚えるに違いない。日本は9条を持ってから1度も他国から攻められたことがないからだ。

　他国からの侵略を阻んでいるのはさっき赤ん坊をたとえに言ったとおり、9条の無垢さ、無力さと、それとセットになった自衛隊と日米同盟の存在だ。9条のうたう非戦・非武装の「理想」は、その無垢さ、無力さ自体が他国からの攻撃を阻むバリアになっている。と同時に、その「理想」は「現実」の力に支えられて国家の中に現存することができている。

　だから、ウクライナが9条に相当するものを持っていたら、という想定には、自衛隊に相当する防衛組織を持ち、日米同盟に相当するシステム、すなわちNATOに加盟するという想定がセットでついて回ることになる。そんなウクライナをロシアは簡単には侵略できないはずだ。

30代　9条は現実からかけ離れており、そんな面倒なことをしてまでしがみつくのは危険だ、といったような主張が昔からある。

年金　9条の非戦・非武装の理念は、人類の究極の理想としてはだれも反対できないはずだ。現実を無視した条項だから変えるべきだと考える改憲派も、「究極の理想」となると反対する根拠を示せないだろう。だが、「理想」である限り、単独で「現実」の中に存在する場所を持つことができない。自衛隊と日米同盟というつっかえ棒を国民が求めたゆえんだ。

　人間とその社会は「理想」なしにはやっていけないようにできている。それを失ったとき、どこへ向かっていいのかわからなくなり、自分自身を見失う。かつてアメリカに挑んで一敗地に塗れた戦後の日本国民にとって、憲法9条がその種の理想となった。

　中沢新一は9条を「修道院みたいなもの」と語っている（太田光との共著『憲法九条を世界遺産に』）。「修道院みたいな狭く限られた場所であっても、人間の現実ということを考えればとても無理じゃないかと思えるような夢や理想を、まがりなりにも実現させてみせましょう、という人たちがいると、その周りの社会まで変わってきます」（同）

ニュース日記　822

中村　礼治

無力という力